

旭川大学経済学部 of 英語教育に関する若干の考察

須 川 宏 之

はじめに

- I 英語能力判定テストの実施
- II イーラーニングのアンケート
- III 経済学部の英語学習は何を目指すか
むすびにかえて

はじめに

旭川大学経済学部で英語を教授するようになって気の遠くなるような月日が流れたが、英語の授業が上手くいったと思えたことは一度もない。毎年、毎年、試行錯誤の繰り返しだった。

最近では、ゼミ活動などでのパフォーマンスが目立って、基礎的な学習・研究がとみると軽んぜられているような気さえしてくる。「TOEICの点数なんてとったってどうしようもないよ!」とか「英検に合格したって?何?」「そんなこと就職活動には無関係だよ!」 反対に「英語はインターナショナルランゲージなんだから話して使えなければ…」 「文法や訳読ばかりでなく、会話中心の授業でなきゃ…」 卒業を前にして大枚をはたいて一か月ほど短期留学、どの程度の成果があるのだろうか。

最近、中学・高校の英語教育を終えて大学に進学してくる学生たちを観察していると、英語を話す、英語をコミュニケーションに用いるということ、英会話ができれば良いと、考えている学生が多くなったように思えるようになってきた。

中学校、最近では小学校から会話重視の英語の授業が行われている。矛盾するようだが、だからこそ読み書きの力が付かず、相対的に英語力が下がってきているのではないだろうか。

大昔、大学を卒業したてのころ東京の日本語学校に就職した。日本語教師養成課程を修了してすぐのことだった。その学校の特徴は「直説法教育」だった。それまで「国語としての日本語」しか知らなかったが「外国語としての日本語」をはじめて意識するようになった。担当のクラスには米国・英国はもとよりロシア人・中国人・フィリピン人など国籍もネイティブな言語も様々な受講生たちがいた。共通語・日本語で授業展開する以外に方法はなかった。

担当教員のそれまでの当該言語の文法・読み書きの能力に裏打ちされた「直説法授業」だったのである。休み時間に台湾の受講生が「私は日本語が好きだ。日本語を勉強したくて日本にきました。でも、この学校に来る前は英語を勉強しなさい。それから日本語、と、云われました。どうして?」と尋ねてきました。

英語を英語で教えることは、ノンネイティブの教員にとってはどういうことになるのでしょうか。しかもクラスのほとんど全員が日本語のネイティブだとしたら…「英語による言語活動を行うことが授業の中心になっていけば、必要に応じて、日本語を交えて授業も行うことも考えられる」のではないだろうか。一言、日本語で説明した方が事態が明確になり授業効率が良いこともありうる。

本学部への入学者の英語力を考えたとき、一律のクラス編成は不可能である。それぞれの英語体験があり「嫌い語」になってしまった学生もいる。

I 英語能力判定テストの実施

2013年度より以下のように英語能力判定テストを前期講義の直前に実施し、クラス分けの参考材料にして正式なクラス編成をしてきた。前期終了時点で各担当者の会議が開かれ、その他の履修科目に迷惑が掛からない範囲でクラス編成を変更する手続きを行ってきた。

後期授業の終わりには同様にテストを実施して、一年間の英語学習達成度を測る指針としてきた。

1 英語能力判定テストについて

- (1) 日本英語検定協会作成 (2002年度から実施されているもの)
- (2) 本学での実施：2012年度から
- (3) 4種類のテスト
Aテスト (1～2級レベル) スコア (0～800)
Bテスト (2～3級レベル) " (0～680)
Cテスト (2～4級レベル) " (0～570) (2013年度より実施)
Dテスト (3～5級レベル) " (0～460)
*学生の状況によりCテストに変更 (上位学生の測定が可能化)
- (4) スコア (絶対評価) は難易度分析され、A～Dテストは同一尺度で表示
- (5) 英語検定との相関性があり、蓄積データ (英語検定協会資料) による分析が容易で学生が理解しやすい
- (6) 2回実施：①2014年4月9日 (一斉実施) ②2014年12月17日 (クラス別に実施)
- (7) 実施問題：Cテスト (2～4級レベル、同一問題)
- (8) 受験者数：74人 (4月9日実施分) / 54人 (12月17日実施分)

2 実施結果

(1) 全体状況

①平均点 (570点満点) 265点 (4/9) 310点 (12/17)

<参考> 平均点の推移

年度	入学時	年度末
2012	281	308
2013	280	298
2014	265	310

②分野別平均正答率 (%)

分野	2014年4月実施分	2014年12月実施分
語彙正答率	52.1	63.3
文章正答率	13.5	14.4
読解正答率	36.3	46.4
リスニング	44.9	52.3

③英語検定協会の分析 (英語検定との相関性：人数構成比) (小数第3位以下四捨五入)

英 検 レ ベ ル	2014年4月実施分		2014年12月実施分	
	人数	割合	人数	割合
準2級レベル以上の実力がああります。	0	0.0%	1	1.9%
準2級レベルの実力が十分にああります。	2	2.7%	0	0%
準2級レベルの実力がああります。	0	0.2%	1	1.9%
準2級レベルまであと一歩です。	2	2.7%	6	11.1%
3級レベルの実力がああります。	7	9.5%	9	16.7%
3級レベルまであと一歩です。	8	10.8%	6	11.1%
4級レベルの実力がああります。	4	5.4%	5	9.3%
4, 5級受験レベルです。	51	68.9%	26	48.1%
合 計	74	—	54	—

(2) クラス別状況

(習熟度別クラスの構成に①実施テストの構成 (一斉) を対応させた分析)

①平均点 (570点満点) * () = 4/9 実施分

A=344.4 (331.1)、B=263.9 (225.1)

②分野別平均正答率 (%)

Aクラス

分野	2014年4月実施分	2014年12月実施分
語彙正答率	69	72
文章正答率	19	26
読解正答率	49	56
リスニング	58	59

Bクラス

分野	2014年4月実施分	2014年12月実施分
語彙正答率	41	49
文章正答率	6	8
読解正答率	26	32
リスニング	35	42

③英語検定協会の分析 (英語検定との相関性：人数構成比)

Aクラス

英 検 レ ベ ル	2014年4月実施分		2014年12月実施分	
	人数	割合	人数	割合
準2級レベル以上の実力があります。	0	0.0%	1	3.1%
準2級レベルの実力が十分にありません。	2	6.2%	0	0.0%
準2級レベルの実力があります。	0	0.0%	1	3.1%
準2級レベルまであと一歩です。	2	6.2%	5	15.7%
3級レベルの実力があります。	7	21.9%	9	28.1%
3級レベルまであと一歩です。	7	21.9%	5	15.6%
4級レベルの実力があります。	4	12.5%	4	12.5%
4, 5級受験レベルです。	10	31.3%	7	21.9%
合 計	32	—	32	—

Bクラス

英 検 レ ベ ル	2014年4月実施分		2014年12月実施分	
	人数	割合	人数	割合
準2級レベル以上の実力があります。	0	0.0%	0	0.0%
準2級レベルの実力が十分にありません。	0	0.0%	0	0.0%
準2級レベルの実力があります。	0	0.0%	0	0.0%
準2級レベルまであと一歩です。	0	0.0%	1	4.8%
3級レベルの実力があります。	0	0.0%	0	0.0%
3級レベルまであと一歩です。	0	0.0%	1	4.8%
4級レベルの実力があります。	0	0.0%	1	4.8%
4, 5級受験レベルです。	21	100%	18	85.7%
合 計	21	—	21	—

旭川大学経済学部の英語教育に関する若干の考察

このような結果からこの年度はクラスを二クラスの分け、イーラニングを使って各々の進度に合わせて無理なく中高校で既知の英語事項の復習をする。共通の英語テキストを使用して毎回の授業を展開し、クラスの状態を見ながら進度を変えることによって受講生が無理なく英語の学習ができるように工夫をしてみた。

本来、このイーラニングの教材は学生一人一人の自学自習を促すものであり、英語の授業時間の大半を占めるような教材ではないと考えている。各担当の講師たちも自らのティーチングスキルをもち、それを自負しているからその能力を発揮せずに終らせてしまっては教師・学生・ひいては本学にとっても大きな損失である。

しかし、本学学生の基本的状況を考えて学習時間の圧倒的不足は否定できないだろう。大学での授業時間も限られているので、学生一人一人の自学自習の時間をいかに拡大するかが大きなポイントになってくる。そのためのインセンティブをいかに与えるかが重要であると考えている。

学生一人一人が進度や取り組み方の違いはあれ自学自習するような習慣づけを行い。それに即した問題・テストを半期30回分作成する。音声教材によるリスニング試験を中心に、90分の授業時間のうち5分ないし10分を使って、テストを実施し学生一人一人の学習時間・進捗状況を各担当が管理し、怠けた学生に対しては警告を発し、個別に面談し指導することが望ましい。

したがって、これからのイーラニングの展開は、学生の自主性を信じ、各担当教員の授業計画も相互に信頼することから始まり、学生の成績評価にイーラニングを織り込むことで学生にインセンティブを与えようというものである。

これを可能にするために学生にも負担のかからないイーラニング教材の選択が急務となったのである。

「イーラニングで学ぶ英語の基礎」・「中級編・前編」「中級編・後編」(New Brain Alliance Inc. 刊)をクラス分けテストの点数に応じて英語の受講生たちに取り組みせることになった。

最初は講師が主導して授業時間の多くをさいて取り組みせていたが、だんだんと自覚をもって自主的に取り組むようになる。

肝要なことはイーラニングがあくまで副教材であり、受講生が自主的に学習することを促す道具である。受講生たちが、自主的に面白がってこのイーラニングを使うような環境を作ることである。

高校生までのスマホ所有率などを考えると、ゲーム感覚で隙間時間にイーラニングをやるようになる受講生も存在するようになってきた。

II イーラニングのアンケート

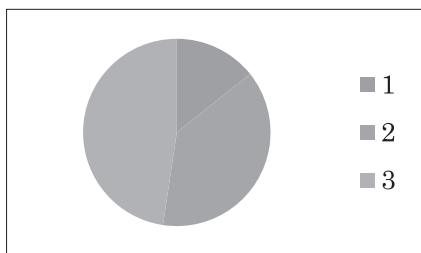
2015年12月16日にAクラス21名、Bクラス27名を対象にイーラニングのアンケートを実施してみた。

問1. イーラーニングの演習をやりながらの授業をどう思いますか。

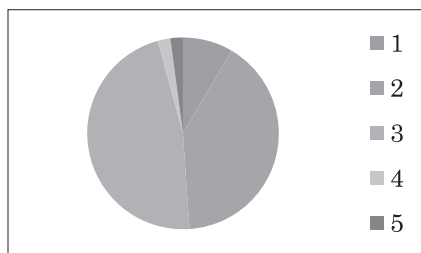
- ①とても満足している ②満足している ③どちらとも言えない ④不満である
⑤とても不満である

① 3 ② 8 ③ 10 ④ ⑤ (A)

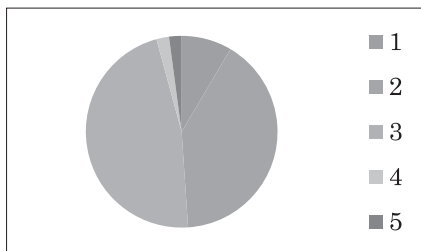
① 2 ② 11 ③ 12 ④ 1 ⑤ 1 (B)



Aのみ



Bのみ

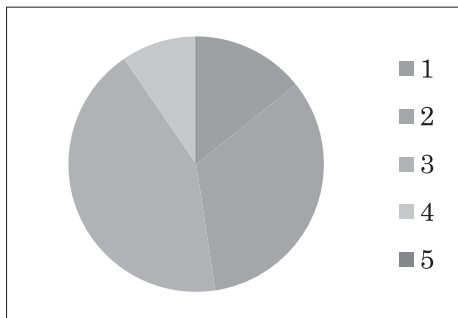


A+B

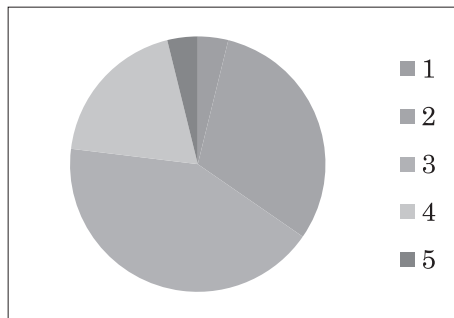
問2. このイーラーニング教材について全体的に満足しましたか。

① 3 ② 7 ③ 9 ④ 2 ⑤

① 1 ② 8 ③ 11 ④ 5 ⑤ 1

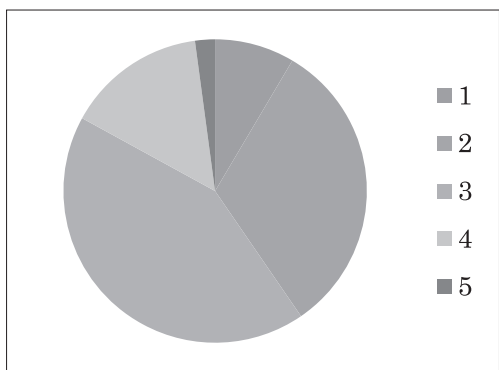


Aのみ



Bのみ

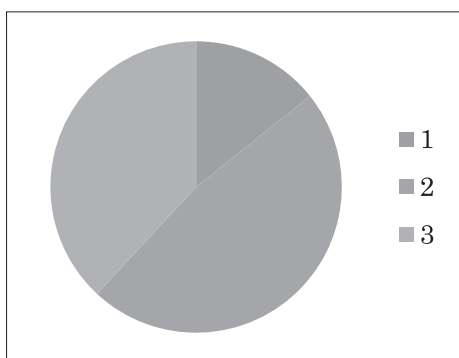
旭川大学経済学部の英語教育に関する若干の考察



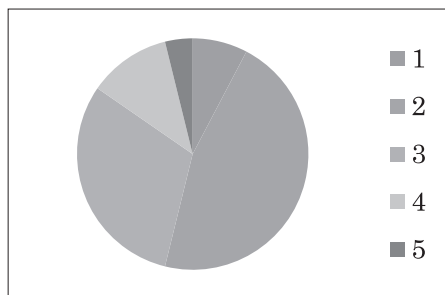
A+B

問3. このイーラーニングの教材は英語の基礎力をつけるのに役立つと思いますか。

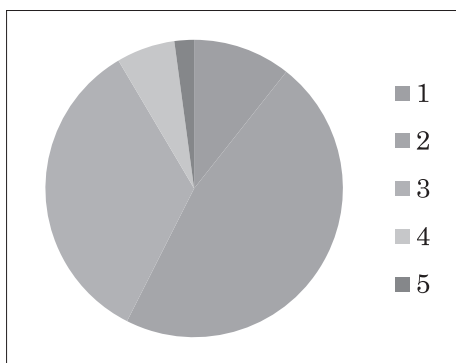
- ① 3 ② 10 ③ 8 ④ ⑤
 ① 2 ② 12 ③ 8 ④ 3 ⑤ 1



Aのみ



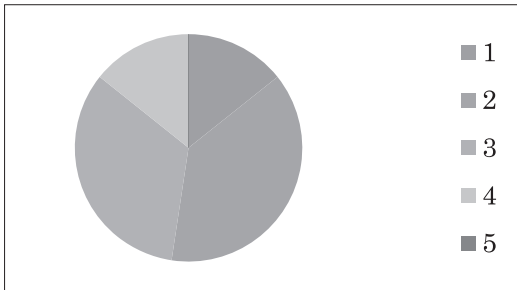
Bのみ



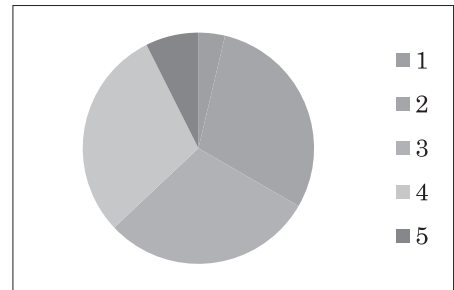
A+B

問4. これからもこのようなシステムを使って英語の学習をしたいと思いませんか。

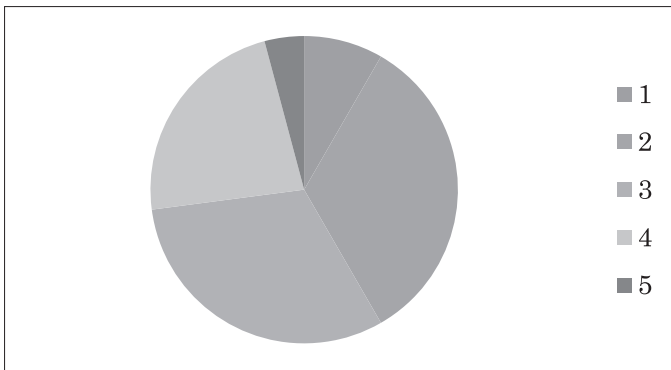
- ① 3 ② 8 ③ 7 ④ 3 ⑤ 5
 ① 1 ② 8 ③ 8 ④ 8 ⑤ 2



Aのみ



Bのみ



A+B

問5. コメント

Aクラス

- ・ 解説が長く良かった
- ・ 最高
- ・ 英文を聞くことができる
- ・ PCで他の画面をつい見たくなる
- ・ 時間をもっとゆっくり掛けて欲しい
- ・ e-learningで少しずつ頭に入ってきた
- ・ 一人で勉強できる
- ・ パソコンは苦手
- ・ 英語の基礎力アップには良い

旭川大学経済学部の英語教育に関する若干の考察

- ・ 苦手を繰り返して勉強できた
- ・ 間違ったときにしつこすぎる
- ・ 少し同じ物が多すぎる
- ・ ノルマを設けたことは良かった

Bクラス

- ・ よかった点：英語の基礎力を身に着けることができそう
- ・ 悪かった点：とても時間がかかり、部活やバイトをしている人にとって苦
- ・ 空き時間にイーラーニングができたのは良かったと思う（良かった点）
- ・ 基礎から復習ができたのは良かった（良かった点）
- ・ もう少し応用的な問題もあったら良かった。（悪かった点）
- ・ 悪い点はイーラーニングをやってもその内容が身につかない。
- ・ どういった発音なのか音声もついているがやるだけ時間の無駄だ。
- ・ 普通のワークを使った授業のほうが読み書きができるし身につくと思った。
- ・ 後期になってイーラーニングが活かされている、身についていると思えなかった。
- ・ やるなら継続的にしないと、忘れるから前期だけでは意味がないと思った。
- ・ イーラーニングをやって基礎的なことを復習しているので応用問題もしてほしかった。
- ・ 個人的には基礎力は身につかなかったように思う。
- ・ 基礎レベルのことを短時間で確認できた。（良かった点）
- ・ 難易度が低かった。（悪かった点）
- ・ 良かったのは中高で習った英文、忘れていたこともあったけど、イーラーニングを学んで復習・思い出すことができた。
- ・ イーラーニングの内容が簡単すぎる。
- ・ 時間があまりなくてやる量が多くて大変でした。
- ・ 中学校・高校の復習が良いかなと自分はやってて思いました。
- ・ ヘッドセットを使用・未使用にわけて使用済みは殺菌などしてくれるとありがたいです。

このアンケートを見る限りイーラーニングの導入は誤りではなかったと思われる。授業時間をどのように配分して受講生が飽きないように時間を配分するか、また、受講生に字自覚を促して自主的にイーラーニングに取り組む時間を可能ならば毎日できるようにさせられたらより効果的になると考えている。

Ⅲ 経済学部の英語学習は何を目指すか

1 経済学部の英語指導のターゲット

入学者の現状と就職等の社会情勢から考えて、Ⅰ、TOEICのテストで計って、その学年にふさわしいスコアを目指せるクラス Ⅱ、大卒の教養として、この旭川地区あるいは将来、各自の生活領域で自らの教養としての英語を身に着けるクラス、大きくこの二つに分類できるように思われる。

なにごともしようかもしれないが、学習をする以上、その学習の到達目標を一つ設定することは大切なことと思われる。TOEICのスコアでも英検でも到達目標を設定して学習に取り組むことは大切であると考えられる。

2 工程表

英語Ⅰの段階で基礎英語（中学英語～高校）の復習と英語Ⅱの段階で高校の英語Ⅰの知識を確実にし、外国人講師の連携を強めて、知識としての英語ではなく、使える英語を身につけるようにする。

それにはしっかりと英語の基礎力を身に付けておくこと、学習者の発展の段階を自覚して、無理なく一段一段英語上達への階段を登らせていくことが大切である。

3 指導項目（内容）

英語の文法の復習をしながら英語を聞く・話す・読む・書く、訓練をする。ネイティブの先生と何となくコミュニケーションが取れた内容を日本人の先生と裏付けをして、イーラーニングで自分で確認・定着を図るようになれば大学で英語の単位を履修した後も自分で自学自習できると考えている。

4 教材機器の位置づけ

大学の授業時間だけでは、英語学習の絶対的時間不足は否めない。そこで英語受講生たちの自主的な学習を促す意味で教材機器を使用したい。加えて、本学の受講生（どこもそうかもしれないが…）教材を与えただけでは宝の持ち腐れになってしまうので、授業の中である程度その教材を使ってみて、自主的にできるように導き・評価することが必要と思われる。

5 学生の学力（英語力）の測定と進捗度調査

従来の筆記試験ではなく、PCによるテストを随時実施し、受講生たちの励みとなるような効果も期待したい。同時に進捗度によってクラスの入替えも実施したい。

クラス分け試験もPCで実施できれば、即座に結果が出せるので、より効果的と考えている。加え

旭川大学経済学部の英語教育に関する若干の考察

て受講生自身が自分の誤りを復習することも、相対的にやり易くなると思われる。

6 共通シラバスの作成

担当者全員が受講生の情報を持ち寄って、受講生一人一人について議論を交わし、学期の節目でのクラス替えができるようになれば、受講生は学習の階段を確実に一步一步のづることができるようになるだろう。

7 課題

①習熟度の継続と可否

上述したように、PCによって学習度を適切に図りながら、可能なかぎり、クラスを随時再編成できるような体制を整えたいと考えている。

②イーラーニングの実施と位置づけ

あくまでイーラーニングは副教材であり、受講生が自主的に学習することを促す道具であるが、受講生たちが、使わざるをえないような環境を作ることは講師の役割と考えている。

③教材（教科書の選定）

各担当者との協議を密にして受講生たちに一番効果のある教材を求めることを怠って手はならないと考えている。

④外国人講師との連携（指導の関連性の強化）

レアリアとしてのネイティブ講師、英語が単にお経の言葉ではなく、実際の生きたことばとして実感してもらいたいと考えている。偏差値カースト制度に象徴されるように、何かテストの点数だけ良ければということではなくことばを実感してもらいたいと考えている。

むすびにかえて

経済学部の学生の外国語教育はまず英語からであれば、一年次では第一外国語を英語に限定すべきであるとする。具体的には「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」をセミインテンシブの形で必修科目とし、その評価は相対評価、あるいはTOEIC等の試験点数によって、合格を決すべきであると考えている。

二年次・三年次において、「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」「第二外国語Ⅰ・Ⅱ」を現行の通年科目から、セミインテンシブ科目で履修できるようにし、その評価は同様に相対評価、あるいは検定試験の合格をもって認め、不合格だった学生は合格するまで単位保留とし、現行のように選択必修科目とすべき

であると考え。

レアリアとしての語学を考えるのであれば、中国語、ハングルの学習を強化して、水原大学、銘伝大学等の交換協定を大いに利用して学生たちを一定期間研修に派遣することも重要なことと考えている。

経済学部ではイーラニングが導入されて久しくなるが、今後このシステムをどのように運用していくかが懸念されている。より良いシステムへの転換、運用方法の検討などである。

いままでは、「イーラニングで学ぶ英語の基礎」・「中級編・前編」・「中級編・後編」(New Brain Alliance Inc.刊) をクラス分けテストの点数に応じて英語の受講生たちに取り組みせ、上記の「英語Ⅰ」の90分の授業展開の中で60分近くに時間を費やしてイーラニングを実施してきた。この方法には賛否両論があり、英語教育学会の客観的・科学的な分析によれば前期のわずか半年の期間では成果が挙げられたか、挙げられなかったか、判断不能とされている。第二に、担当教員に無理解な形で半ば強制的にイーラニングを導入したのでは、どんなに素晴らしいシステムでも成果は期待できないだろう。

今後、どのようにこのシステムを展開するのが本学学生ならびに担当教員にふさわしいか、どのような可能性が存在するか、絶えず問題意識の中に入れておく必要があるだろう。

本来、このイーラニング教材は学生一人一人の自学自習を促すものであり、英語の授業時間の大半を占めるような教材ではないと考えている。各担当の講師たちも自らのティーチングスキルをもち、それを自負しているのである。その能力を発揮せずに終わらせてしまっは教師・学生・ひいては本学にとっても大きな損失である。

しかし、本学学生の基本的状況を見ると学習時間の圧倒的不足は否定できない。大学での授業時間も限られているので、学生一人一人の自学自習の時間をいかに拡大するかが大きなポイントになろう。そのためのインセンティブをいかに与えるかが重要であろう。

そこで学生一人一人がイーラニングで自学自習していることを前提にし、その学習時間・進捗状況を各担当が管理し、怠けた学生に対しては警告を発し、個別に面談し指導していく必要があるだろう。

さらにレアリアとしての英語を実感させるために日本人の教員とネイティブの教員がペアを組んでクラスを担当し、さらに緊密に連携した授業展開ができるようにしたいものである。「英語Ⅰ」と「英語Ⅱ」のセミインテンシブ方式が良策と思われる(通年このシステムを使用し、従来のように年度当初のクラス分け試験と年度末の達成度試験を行い受講生に進歩の度合いを自覚させる。

教室は情報教育センターのコンピューター教室と短大のPC教室を使用し、ネイティブの講師が会話に適切な教室を希望したときは自由に変更できるようにする。

二年次以降の第二外国語科目についても、英語と同様、「安きに流れる」(単位が簡単に取れる科目に流れる)のではなく、外国語学習の面白さや醍醐味のわかる授業展開を心掛けたいものである。